

汪 正仁 著 『東洋医学の真髄』

本書は東洋医学を学ぶ初学者、あるいはそれに興味を持つ一般読者に向けた入門書といえる著作である。筆者が講師を務めた「中国健康セミナー」(1996年、愛知県瀬戸市教育委員会主宰、5回)、「東洋医学と健康法」(2009年、別府市教育委員会主宰)、また「東洋医学と気功」(同年、立命館アジア太平洋大学孔子学院主宰、10回)などを契機に、「東洋医学の真髄」を日本にもっと伝えたいという筆者の思いから本書が執筆された。

著者の汪正仁(ワン ジェンレン)氏は、1956年台湾に生まれ、Swire Group Taiwan, Sea-Land Service, 伊藤忠エクスプレスを経て、名古屋大学大学院国際開発研究科で修士号、博士号を取得。立命館大学経営学部助教授、立命館アジア太平洋大学アジア太平洋マネジメント学部助教授、同教授兼国際部副部长などを歴任し、現在、同大学大学院経営管理研究科(MBA)教授に任じておられる。また、中華民国(台湾)易経学会会員、国際港湾協会(IAPH)日本会議理事、日本港湾経済学会理事、大分県地方港湾審議会委員など幅広く活躍されている。専門分野は東洋医学、鍼灸学、養生術、四柱推命、紫微斗数(占星術)、国際物流、国際貿易であり、東洋医学に関する講演も上述のごとく行われている。

筆者は幼児より医学に興味を持たれ、西洋医学、鍼灸の書を学び、また中華民国易経学会(台北)主催の東洋医学講座を受講。その後、手相面相、易学、四柱推命、占星術など幅広く修められた。上記東洋医学講座で従学した周左宇氏は、清朝の道光皇帝の主治医の孫にあたり、鍼灸に精通される名医という。筆者は、実娘の危急の病を自身の鍼術により救ったという出来事を契機に、東洋医学の学習に一層精励されたと自序で述べられている。

本書の特色は、その自序において「本書の最大の特色としては、ミクロの東洋医学に手相や面

相、易学、占星術、吐納導引術(気功)の分野も入れ、東洋医学の『真髄』とも言える『六味一体』の『マクロの東洋医学』を解説した点にある」と述べられている。

本書の内容は、まず始めに「東洋医学の起源と発展の経緯」を中国・日本・朝鮮半島に章を分かって、それぞれ現代までの歴史を概説する。次に東洋医学の「基本思想」(陰陽五行説)、「宇宙観」(天人相応)を述べる。さらに、筆者が言うところの「前例のない西洋医学の諸分野に相当する東洋医学の諸分野を分かりやすく整理した」という、「生理学」(営・衛・気・血・津液論)、「内科学」(五臓六腑論)、「解剖学」(十二経絡・奇経八脈と経穴)、「外科学」(鍼灸医学)、「診断学」(四診)、「症候学」(八綱弁証法)、「病理学」(六淫外因、七情内因、不内外因)、「薬物学」(漢方薬の性質・作用・効能・療法)、「食養学」(医食同源)、「予防医学」(『黄帝内経』の養生法)、「免疫学」(吐納導引術・気功)と続く。

中医学を基礎として東洋医学理論を概説し、ときに筆者の経験や私見を交え、身近な表現を以て解説が加えられている。図表が豊富に用いられ(図・写真は全てカラーである)、要語には読み(中国音、ハングル、日本語、英語を適宜用いる)が出現ごとに付され、また古典の原文が示されるなど、入門者にも分かりやすいよう配慮がなされている。

第12章から終章までは飲食、生活習慣、呼吸運動法と、養生法に関する事項を述べる。「第14章 東洋医学の免疫学—吐納導引術・気功」では、吐納とは「体内に滞っている不潔な気を吐き、同時に大気から新鮮な気を体内に吸い込む」、導引とは「筋肉と関節を動かしながら呼吸を通じて大自然から吸い込んだ新鮮な気をイメージとして脊椎に導いていく」ものであると説明している。呼吸法や導引術(運動療法)、行気や存思などは、

馬王堆や張家山など出土文献にも記述が見られようにその淵源は古く、東洋医学の重要な一角をなす。それらを、筆者が専門とする気功法を中心として、理論や実践法の概説をしている。

東洋医学は鍼灸療法、湯液療法、養生法を三代柱とするが、従来の東洋医学入門書においては養生法に関する部分が少ない、あるいは省かれてい

ることが多かった。本書は養生法にも十分な紙数を費やしており、これも本書の特徴の一つとして挙げることができよう。

(天野 陽介)

[成山堂書店、〒160-0012 東京都新宿区南元町
4-51 成山堂ビル、TEL. 03 (3357) 5861、2011年
3月、A5判、296頁、3,400円+税]

Gabor Lukacs:

Extensive Marginalia in Old Japanese Medical Books

本書は、古医書の手書きの書き入れの分析を通して、江戸時代の医師がどのように医書から知識を得たかを調査する一冊である。著者はフランス国立科学研究センターの元研究所部長であり、歴大な古医書を所蔵する愛書家のルカシュ博士である。本書が古医書の書き入れを課題とした理由は、近年西洋では書物史の専門家の間で、書き入れ部分の意味を本文と同等に評価する傾向が見られ、比較研究が熱心に行われているにもかかわらず、コーニツキの名著『日本書物史』など日本の書物についての西洋の先行研究では、手書きの書き入れの意義が無視され、現在まで十分研究されてこなかったからである。著者は日本の書物の二つの特徴によって、西洋の書物と比べ、日本の書物にある書き入れの方が分析しやすいと述べている。一つは、書き入れが本文の配置を守りながら、ほぼ訂正なくきれいに書き入れているので、とても判読しやすい。もう一つは、注釈や書き入れをした人が本文及び書き入れの箇所にも名前、書名、薬名などを明らかにするため、識別記号をよく使った。

著者は本書で中国と日本の古医書8冊を取り上げ、それぞれ現存バージョンのいくつかの手書きの書き入れについて比較調査を行い分析している。本書の構造は次のようである(括弧の中は著者が研究したバージョンの所蔵先である)。

・第1章：陳実功『外科正宗』(著者所蔵、カリ

フォルニア大学ロサンゼルス校ルイーーズダーリング医学図書館所蔵、北里大学東洋医学総合研究所医史学研究所所蔵、日本国会図書館所蔵)

・第2章：滑寿『十四経發揮』(著者所蔵、内藤記念くすり博物館所蔵、英国ウェルカム図書館所蔵)

・第3章：谷村玄仙『十四経發揮鈔』(日本国会図書館所蔵)

・第4章：賀川玄悦『産論』(内藤記念くすり博物館所蔵、武田科学振興財団杏雨書屋所蔵、京都大学富士川文庫所蔵)

・第5章：賀川子啓『産論翼』(著者所蔵、内藤記念くすり博物館所蔵、英国ウェルカム図書館所蔵)

・第6章：片倉鶴陵『産科発蒙』(著者所蔵、内藤記念くすり博物館所蔵)

・第7章：杉田立卿『眼科新書』(著者所蔵)

・第8章：虞搏『医学正伝』(米国コロンビア大学東アジア図書館所蔵)

選択された古医書を見ると、中国の伝統的知識(第1章、第2章、第3章)、日本の革新的臨床知識(第4章、第5章、第6章)、西洋の革新的臨床知識(第7章、第8章)という三つの知識源泉に基づいて、江戸時代の日本医学の特徴をよく語っていることが分かる。各章は大体同じ手法で分析されている。古医書の著者、内容と構造が紹介された後、本全体に含まれている書き入れの字